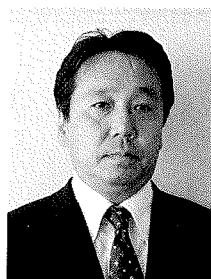


： 卷 頭 言 ：

通 勤

(財) 日本植物調節剤研究協会 常務理事 横山 昌雄



研究所がある牛久に赴いて約3ヶ月が過ぎた。上野から牛久まで通っているが、この9年で通勤中の景色が大分変わった。

谷中霊園に通じる桜並木を反対に、天章院篤姫が13代将軍家定とともに葬られている上野寛永寺に向かう。境内は桜や銀杏などの大木が空を覆い、昔から変わらず閑散としている。かつてはキャッチボールなどができる開放的な庭であったが、最近強固な外壁が新築され、警備や管理が強化された。寛永寺の境内を抜け、国際子ども図書館と国立博物館に挟まれた道を行く。国際子ども図書館はかつての国会図書館支部上野図書館で1906年に建設されたルネサンス様式の明治洋風建築で荘厳な雰囲気があった。数年前に建築家安藤忠雄氏により改築され、外壁の一部が現代風のガラス張りに変わった。前を走る道も整備され、幾何学的な模様のついた歩道ができ、車道との間にはツツジの上品な生け垣が作られた。その先には東京芸術大学がある。芸大も奏楽堂、美術館など、新しい校舎が次々に建てられているが、上野公園に面している美術部の旧正門は昔のままに残されている。外から見える桜の大木がクズに覆われているのも一興か。通用門として現在も使用されている音楽部の正門とともにいつまでも残して貰いたいものである。上野公園に入ると、都立美術館の裏手から噴水広場に抜ける小路がある。上野の森と言われるように木々が鬱そうと生え、いつも薄暗い。3年くらい前までは青テントが点在し、ホームレスの寝床があったところである。現在はその小路に沿って芝生の広場ができ、芸大生の卒業作品が数点展示されている。とてもおしゃれな芸術の道になったが、木々に覆われているため芝の生育が悪く、芝が剥げ、土がむき出しになっているところが多く、ホームレスの変わりに

雑草がしっかりと寝付いている。噴水広場に出ると急に視界が開ける。周囲の森と青空と噴水のコントラストは絵になる。ところが、周辺に高層ビルが立ち、それらの姿が否応なく眼にはいる。かつて威風堂々としていた上野東照宮の五重塔は木陰に隠れているようにしている。上野駅へと進むと東京文化会館と西洋美術館が上野駅の公園口前で対峙している。西洋美術館は「モダニズム建築の巨匠」といわれるフランスの建築家ル・コルビュジエが設計した建築物で、世界遺産を目指しているとか。前川國男氏が設計した東京文化会館は無言のままである。

上野駅もだいぶ改装されたが、朝から人で溢れているのは変わらない。9年前、牛久に向かう常磐線はくつろげるほど空席が目立つ静かな車内であったが、だいぶ変わった。上野を出て、次の停車駅の日暮里ですでに満席になる。立ち席すらある。上りの満員列車に対して優越感に浸るなんてことは許されなくなった。

車窓から見る常磐線沿線も変わった。空き地や農地が住宅地や工場に変わり、利根川を渡るまで田畑はほとんど見る事ができなくなった。それに加え、停車駅の周辺には高層ビルが目立つようになった。

牛久駅周辺にも高層マンションが建ち、表通りには住宅地や新しい店ができています。研究所周辺まで来るとようやく田園地帯になる。この時初めてほっとする。しかし、休耕田や耕作放棄された田畑がやたら目につく。

首都圏の整備や再開発が進み、各地に上野の山より高い丘がいくつもでき、注目されているが、農地はそのままである。放置されたままである。これまで多く恩恵と知恵を与えてくれた土地を置き去りにはできないと柏田町で思う。